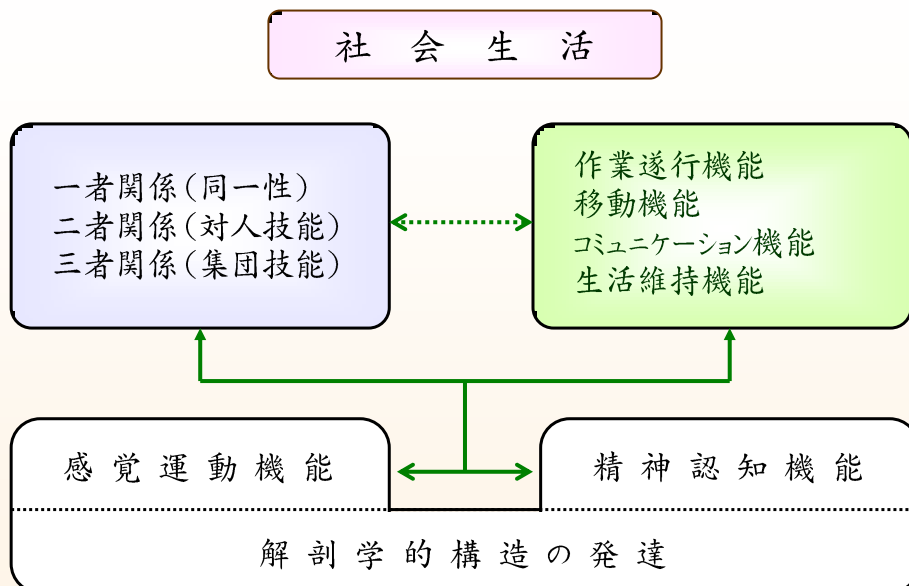
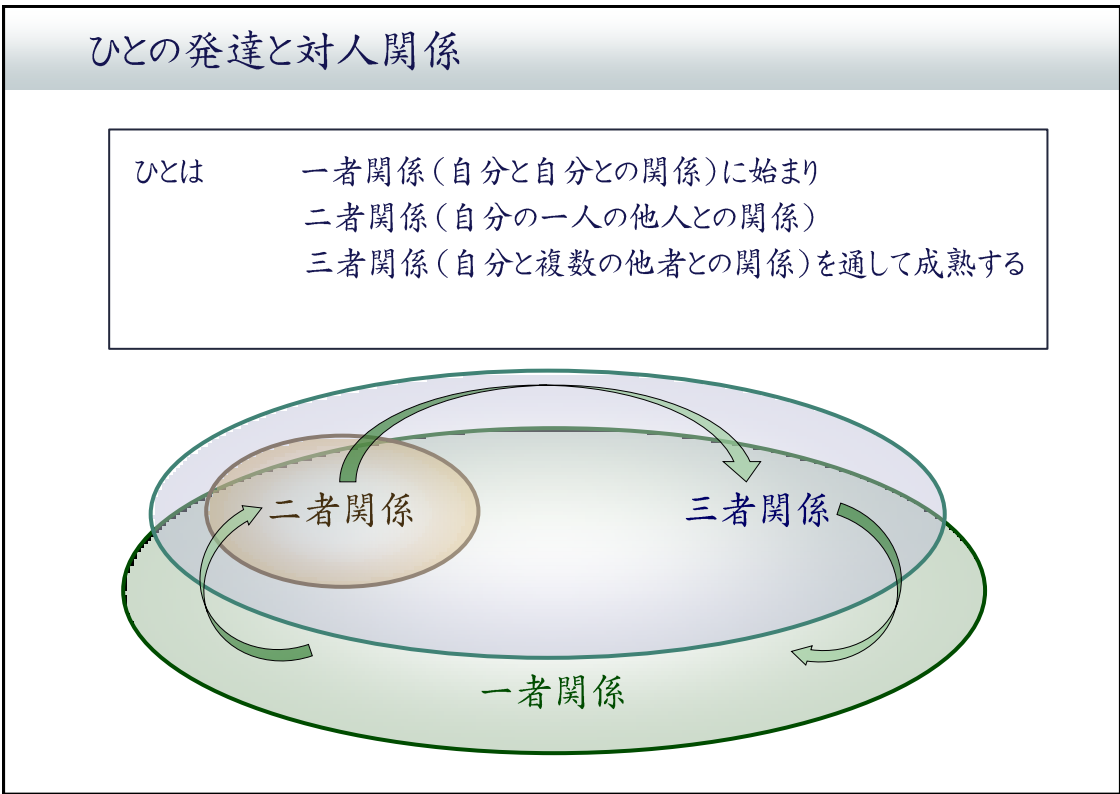
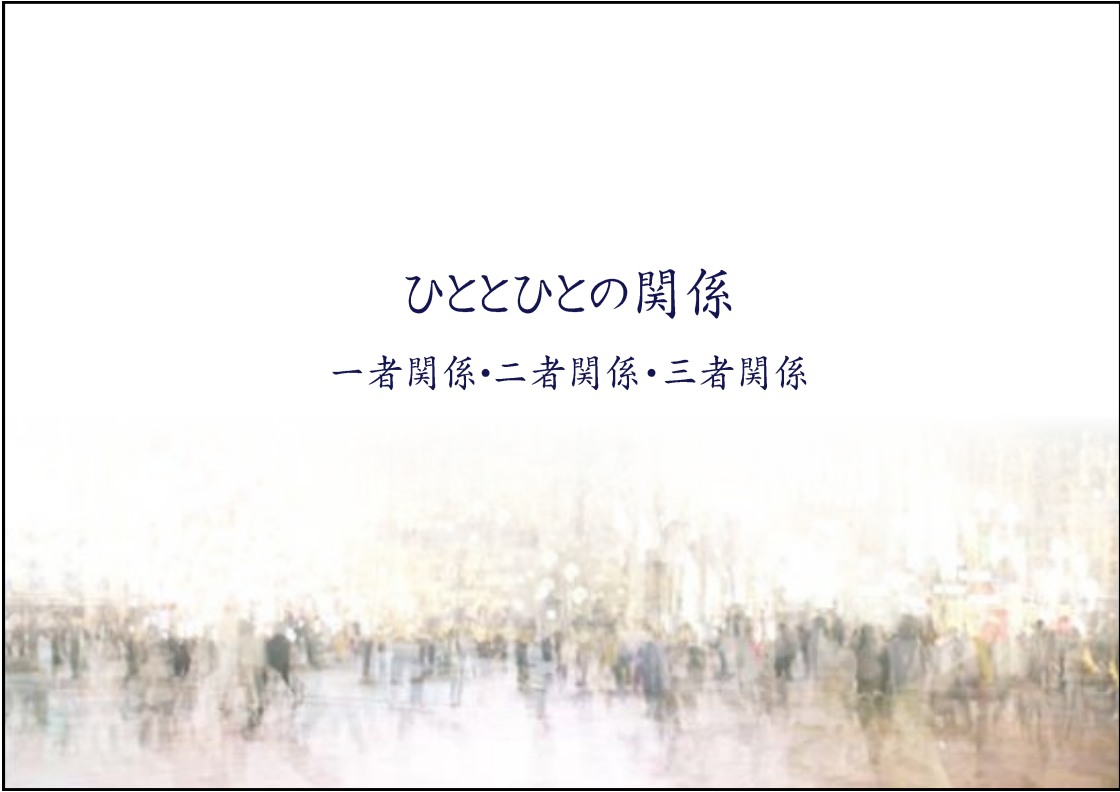


集団・場とその評価

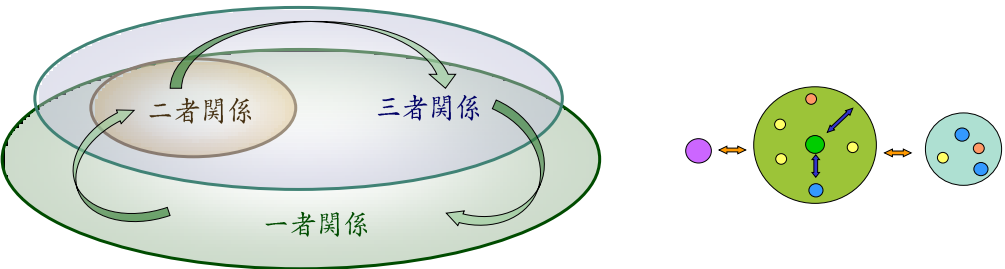
Hiroshi Yamane ; OTR, PhD
Human Health Science
Graduate School of Medicine
Kyoto University

社会生活に必要な技能と下位機能






対人関係の力動

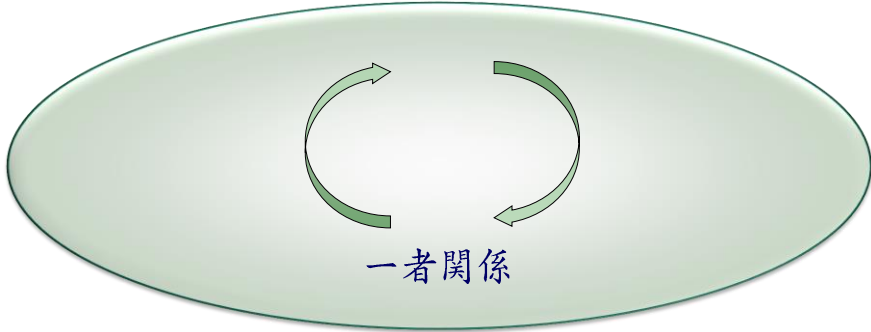


一者関係 — 防衛機制(個人力動)	}	集団内個人対集団
二者関係 — 転移・逆転移		集団外個人対集団
三者関係 — グループダイナミクス		集団間力動

わたしと私：一者関係

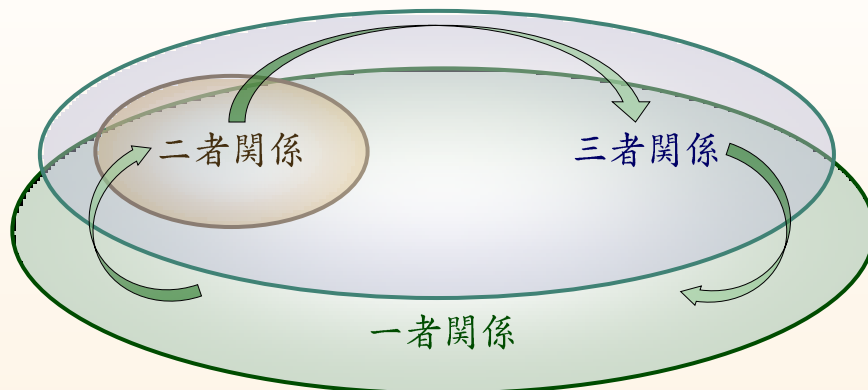
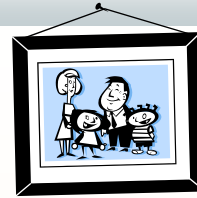
わたしと私の関係を一者関係という
 自己同一性の確立は一者関係の成熟による
 ひとはみな この「わたしと私」の関係のありように四苦八苦





一者関係の成熟

対人関係は一者関係に始まり、二者関係、三者関係にそれらを通して一者関係が成熟する



こころのゆらぎを鎮めよう

defense mechanism

一者関係の成熟過程で生じる stormy な心理的攪乱
 このこころのゆらぎを鎮めようとはひとはさまざまな対処をする
 対処しきれない場合や対処が適切でないところの奥で感じているとき



こころのゆらぎを鎮めるため防衛機制 (defense mechanism) が働く
 防衛機制には、適応的なものと不適応的なものがあるが、いずれも無意識に働き、こころの自由を奪う

否認 抑圧 分裂 同一視(同一化) 投影(投射) 反動形成
 退行 置き換え 攻撃 理想化 脱価値化 昇華 合理化
 分離 逃避 補償 摂取 注目を集める

こころのゆらぎを鎮めよう

defense mechanism

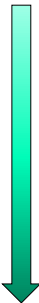
一者関係の成熟過程で生じる stormyな心理的攪乱
 このこころのゆらぎを鎮めようとはさまざまな対処をする
 対処しきれない場合や対処が適切でないところの奥で感じているとき



こころのゆらぎを鎮めるため防衛機制 (defense mechanism) が働く
 防衛機制には、適応的なものと不適応的なものがあるが、いずれも無意識に働き、こころの自由を奪う

精神的に脆弱、精神的な病いにかかっている場合には、特定の機制が常習的に柔軟性を欠いて用いられ、病的症状や性格として表面化不適応状態を引き起こし、生活に大きな支障を来す
 精神症状の多くは、本能的衝動が不適切に防衛され形成される

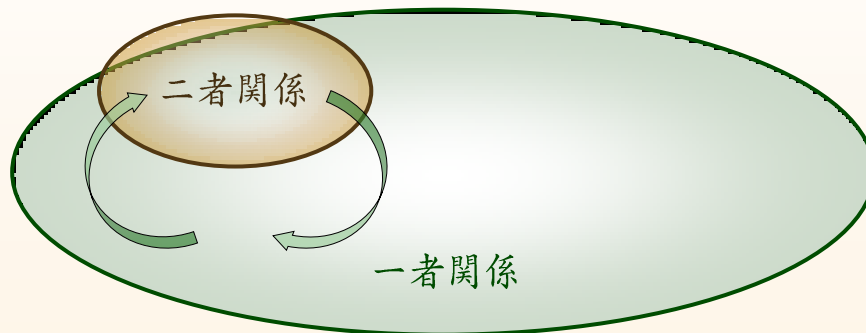
こころの揺らぎが治まるプロセス

	<p>自分と似通った仲間を求める</p> <p>他人に受け入れられる安心</p> <p>他人に認められ自己を確認</p> <p>他人の役に立つ喜び</p> <p>自己を確認するものさし</p> <p>モデルを求める</p>	<p>普遍的体験と安心感</p> <p>受容される体験と安心感</p> <p>他者による承認と自己確認</p> <p>愛他的行為と自己尊重</p> <p>他者を介した自己確認と自己評価</p> <p>模倣修正と自己確立</p>
---	---	---

ひとの成長、わたしが確立する(自己同一性の確立)プロセスと
 こころのゆらぎがなくなる、こころの病いが癒えるプロセスはよく似ている。

ひとの発達と対人関係:二者関係

この世に生まれて初めての二者関係
それは、重要な養育者(母)との絶対的依存的共生関係
二者関係は一人の対象との折り合い



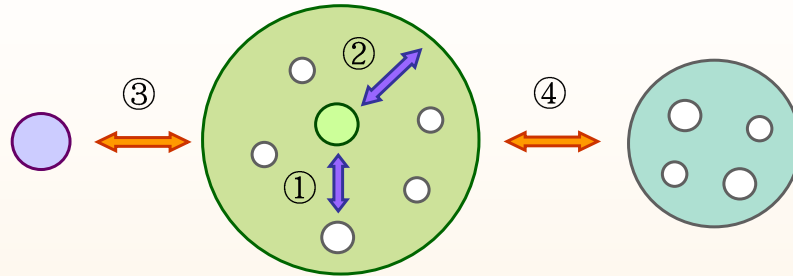
対人交流技能の発達と集団:二者関係の発達



- | | |
|-------------------------|--------|
| 1. 基本的な信頼感により他者を受け入れる能力 | 8～9か月 |
| 2. 偶発的なある期間共同する関係をもつ能力 | 3～5歳 |
| 3. 権威ある者を安定して受け入れる能力 | 5～7歳 |
| 4. 仲間として対等で親しい関係をもつ能力 | 10～14歳 |
| 5. お互いの役割を理解した関係をもつ能力 | 15～17歳 |
| 6. 成熟し安定した親密な関係をもつ能力 | 18～25歳 |
| 7. 養育, 保護する関係をもつ能力 | 20～30歳 |

(Mosey, 1986)より要約

ひとの発達:三者関係から社会的関係へ



- ① 集団内における成員間の相互作用
- ② 個人と所属集団との相互作用
- ③ 集団外の個人と集団との相互作用
- ④ 集団間の相互作用

対人交流技能の発達と集団:三者関係とその広がり



- | | |
|--------------------------------|---------|
| 1. 他者と場を共有してすごすことができる | 18か月～2歳 |
| 2. 短期の共通な課題に取り組むことができる | 2～4歳 |
| 3. 自己の興味により比較的長期の課題に取り組むことができる | 5～7歳 |
| 4. 相互の欲求を満たし同質の集団に参加する | 9～12歳 |
| 5. 適応的に役割をとりながら集団に参加する | 15～18歳 |

療法としての利用

- 1905年 Prattの結核患者学級
- 1910年 Morenoの心理劇
- 1940年代 療法として試行
第二次大戦中の戦争神経症の治療をきっかけに普及
- 1980年代 理論や技法の基本的体系がほぼ確立



構造化され、集団力動をもちいた個人の変容などが主目的
場に関する研究は物理学の領域でなされていたが、療法としての集団との
関連では理論化されなかった(「ひとと集団・場」が初めて)

ひとの集まり

ひとはなぜ集まり、なぜひとを集めるのか



ひとと集団の関係

ひとは人の集まりに対して
矛盾する二つの意識をもっている

受け入れ, 認められたい

集団帰属意識

わたしは「私」でありたい

個の自己意識

相矛盾する二つの意識のなかで

受け入れられ, 認められたい

集団帰属意識

わたしは「私」でありたい

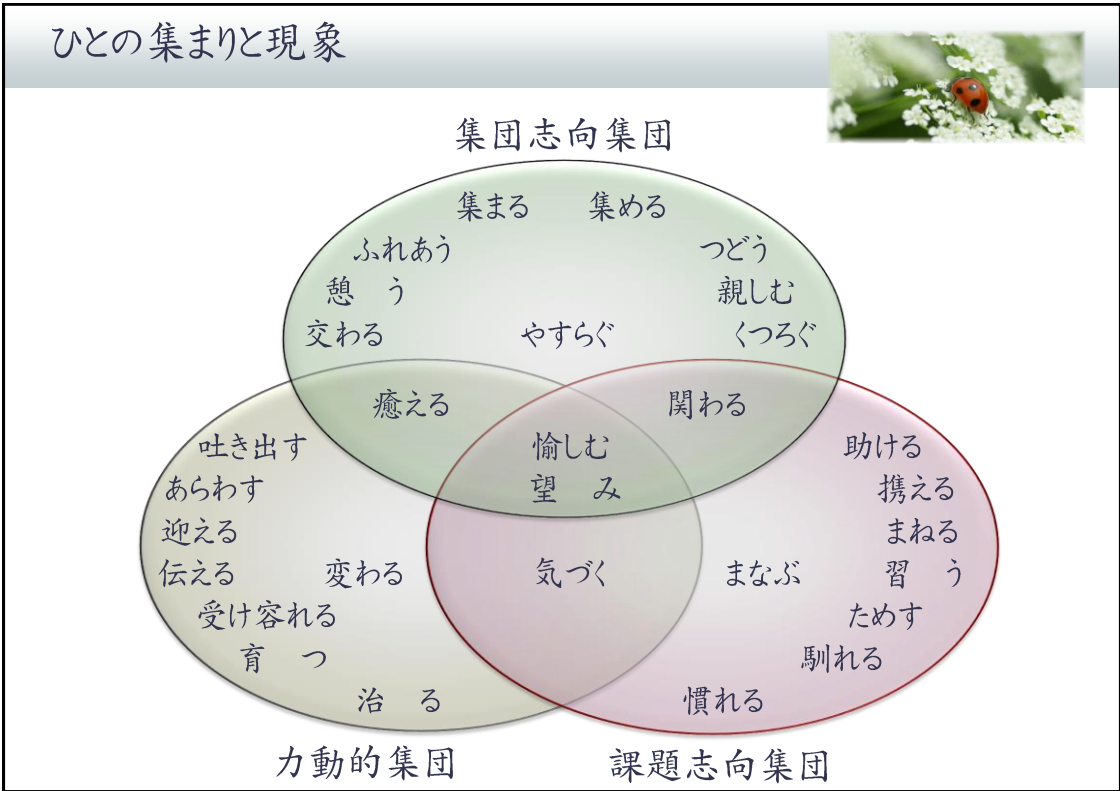
個の自己意識

自分と似通った仲間を求める
他人に受け入れられる安心
他人に認められ自己を確認
他人の役に立つ喜び
自己を確認するものさし
モデルを求める

普遍的体験と安心感
受容体験と安心感
他者承認と自己確認
愛他行為と自己尊重
自己確認と自己評価
模倣修正と自己確立

1人でできないことをする
1人で生きることが難しい

協力, 合同, 共同・
社会的動物の習性



療法集団の治療因子 I:小集団 II:大集団

10から20名程度の中集団や大集団でも見られることがある

I	II	日本語	英語
◎	○	希望をもたらす	instillation of hope
◎	○	普遍的体験	universal experience
◎	○	受容される体験	accepted experience
○	△	愛他的体験	altruistic experience
○	△	情報の伝達	imparting of information
○	△	現実検討	reality orientation
◎	△	模倣・学習・修正	imitate learn correct
○	×	表現・カタルシス	expression & catharsis
○	×	相互作用・凝集性	interaction・group cohesiveness
◎	△	共有体験	common experience
○	×	実存的体験	existential experience

I:小集団 II:中～大集団 ◎:生じやすい ○:ファシリテートが必要
 △:偶然性が大きい ×:むづかしい

目的に沿った療法集団の形態

形態		対象人数	特性
パラレル(1対複数)		≤10	場の共有を利用した個人療法
小集団	並行集団	4～5	緊張, 自閉傾向, 認知機能低下に対する集団力動を積極的に用いない小規模集団
	課題志向集団	7～12	共同して自己課題に取り組む
	力動的集団	≤10	自己洞察・自己変容が目的
中～大集団	集団志向集団	10～15	集まることの効果の利用
	短期課題集団	10～20≤	多くの人数が集まることが必要な活動

療法集団と目的

課題志向	生活技能	日常生活技能 社会生活技能 仕事技能 対人関係技能 コミュニケーション技能 セルフコントロール技能
	機能訓練	感覚運動機能 認知機能
集団志向	受容体験, 普遍的体験, 集団帰属欲求の充足, 自他に対する関心の回復など	
力動集団	カタルシス, 解除反応, 洞察, 人間関係の成長自己実現, 行動変容, 自己変容	

集団の構造因子

集団の大きさ(成員数)
成員の等質性
開放度
スタッフ(構成・役割)
表現手段(ことば・動作・作業)
集団の目標
集団標準と価値
時間・頻度・期間
場所・空間

療法としての評価



